



巻頭言

伝 承 力

NPO法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

11月初めにふくおかアジア文化塾の「越と信濃の旅」に参加した。弥彦神社（新潟県西蒲原郡郡弥彦村）からスタート、高田城址公園（上越市）などを経て糸魚川市に入り奴奈川神社、ヒスイ海岸、フォッサマグナミュージアムと長者ヶ原考古館、翌日は長野県白馬村のホテルを出発、穂高神社などと、諏訪大社の四社を巡った。

まさに日本海文化の源流のエッセンスを堪能した。このツアーの始まった11月5日には日本古代史ネットワークの講演会が上越市で開かれた。「日本海の神々」をテーマにあついで討論がくりひろげられたのだろう。

私はこの辺りを5度にわたって旅したことがある。何度同じところを旅しても新しい出会いがある。旅を愛する人の本質だ。今回もいろいろの出会いの中で最も心を潤わしてくれたのは、川崎日香湮さんの「お諏訪さま物語」という絵本に出会えたことだ。

この絵本はとても綺麗で、詞書も優しくて魅了的な文体が続く。古事記の大国主命と奴

奈川姫のラブシーンの原文と現代語訳のバランスよい表現、ちょっと真似できない。情緒あふれる歴史書になっている。川崎さんといえば、古事記の奴奈川姫の絵で有名だ。岩絵具を使った日本画の大作は諏訪大社や出雲大社に奉納されている。絵には翡翠を砕いたものを塗り込めてもいる。何百年も色あせない工夫がほどこされているそうだ。目を見張る出来栄えだ。

物語は、諏訪大社のご祭神・建御名方命の生まれる前からとその一生が綴られている。しかも古事記や日本書紀の情報だけでなく、地元の伝承が一杯入っている。

こんな本があったらどうか？ さっそく Facebook 友だちの川崎さんに連絡、「日本海文化圏の伝承はなぜこんなに豊かなのですか」「よその地域より多いかもしれませんね」というやり取りだった。

全国的に見ると、九州がもっとも伝承力があるように思える。どうであろうか？ これは河村哲夫さんや、安本美典さんの努力があったからかもしれない。

ひるがえって、大和を見ると、記紀といくつかの古典資料を入れると圧倒的なボリュームを誇っている。ところが、大和では「国家権力が関わったものは都合良く変えられている」の一言で活用されていない。情けないことである。

少しあともどりして、日本海文化圏について私の思いを綴ってみる。最初の旅は、会社から富山への出張があって、仕事が終わってから土日を利用してレンタカーで奴奈川神社をはじめ糸魚川市の各施設、書籍もいくつか仕入れ、能登半島の珠洲市まで足を伸ばした。その時の資料によると、能登での大国主命の性格に驚かされた。

大国主命は奴奈川姫がふるさとへ帰ったことを知って、家来を能登へ派遣、奴奈川姫を追い詰め、奴奈川姫が池に入り自殺したとの伝承を読んだ記憶がある。今度の旅ではそのような伝承を聞かなかつたし、姫が息子の建御名方命に会うために諏訪を訪れている逸話が描かれており、私の記憶違いか、誤伝だったのかもしれない。

「お諏訪さま物語」は大国主命の子供として最後まで高天原勢力に抗った神だ。諏訪にとどまることで国譲りを受け入れた。

縄文の神様^{もれや}洩矢の後裔である神長^{じんちょうかん}官資料を展示している「神長官洩矢史料館」を2度目と3度目の旅で訪れたことがある。難解な展示と資料群に何もわからず退散した覚えがある。ところが「お諏訪さま物語」を読むと疑問は氷解してしまう。

縄文の神と建御名方命の戦いと和解を次のように描いてある。

「さて、諏訪へと移ったタケミナカタノミコトですが、諏訪の地はすでにモレヤノミコトという神様が治めていたのです。

諏訪の湖からそそぎ出る天竜川のほとりで、モレヤノミコトは鉄輪をもってタケミナカタノミコトをむかえうちました。

タケミナカタノミコトは、とっさにみずらに結^ゆわえていた藤つるをほどくと、モレヤノミコトの鉄輪に向かって投げたのです。

すると不思議なことに、藤つるがへびのように鉄輪にするするとからみついたかとおもうと、みるみるうちに鉄輪はさびてしまいました。

これにおどろいたモレヤノミコトは、タケミナカタノミコトに降参していいました。

『私は、すべてあなたに従うことにします。』

心のやさしいタケミナカタノミコトは、モレヤノミコトを受け入れたのです。

諏訪の王となったタケミナカタノミコトは、モレヤノミコトを神長官という役職にすえ、ともに力をあわせて諏訪の統治にあたったのでした。」

小難しい言葉で語るより、子供に話してあげられる文章の方が歴史の深層を抉っているのだ。

注には「モレヤノミコト……洩矢命。子孫の守矢氏は、諏訪大社の神長官という役職に就き、祭祀を担当しました。洩矢神との話は神長官史料館が保存する「諏方大明神画詞^{すわだいみょうじんえことば}」に記されています」となっている。今回電話で同史料館に「諏方大明神画詞は展示していますか」と問い合わせたところ、「古いものでめったに展示できない。年間テーマを決めています。令和4年は鎌倉殿の13人に関連する北条氏文書でした」ということだった。「複製で、この物語を分からせるようにしていますか」と聞くと「ないですね」だった。伝承を信じない信じたくない研究者の無意識の行動で重要度が下がっているだけのように思える。

誰も吉備の伝承に目を向けなかったのをたったひとりで今挑んでいる。少々ドンキホーテ気取りだが違っていた。私の前にただひとり松山のお医者さんで、平成の初めから岡山へ通われて書かれた労作「吉備津彦命の正体」（1996年刊）を著わされた岡本正人さんがいた。頭の下がる努力されている。ただ、思い込みの部分は若干目立つ。とはいえ、いくつかの部分でヒントをいただいた。この本がなければ「吉備津彦命伝承を追う」（「季刊邪馬台国140号総力特集吉備・瀬戸内の古代文明」掲載）はなかったろう。心から感謝申し上げます。

私の取材開始より25年も早い。この年月の差は大きく、岡本さんの取材された方が何人も鬼籍に入られた。ご子息の方から「親父に聞いておけばよかった」と聞かされた。

団塊世代は親の考えに反発、育てる親も子に遠慮した結果だろう。戦争に負けるとはこ

うということなのだ。こうして伝承文化が失われていくのであろう。

さて、吉備の伝承力はいくばくのものだろうか？

^{きびのさきつや}吉備前津屋、^{きびのたさ}吉備田狭、^{わかひめ}稚媛の3反乱事件（雄略帝への不敬や新羅との密約、皇位継承問題）が続き、本宗家の賀陽、下道の両家は一時逼塞、多くの資料を失った。したがって必ずしも伝承力は高くない。そう思っていた。今回、^{ふつしみたまのつるぎ}布都斯御魂劍（十握の劍）を調べていて奇跡が起きた。

大和の石上神宮にあるはずの劍が、吉備津神社の本殿に今もあるという古文書が出てきたのだ。劍の存在も確認されている。この古文書は10年前に出版された「改定増補備中吉備津神社文書中世編」で、その付録に載っていた。まだ研究者もあまり見ていないようだ。

劍の方はもちろんレプリカだろうが、この劍が10世紀以前からあることを裏づける伝承が小さな神社に伝わっていた。詳しくは本号の「素戔鳴尊の劍（上）」に掲載した。

吉備もまんざらじゃない。努力すれば伝承力は上がるのかもしれない。そんな思いで「越と信濃の旅」の余韻を楽しんでいる。 (了)